

ナラティブマクロ構造評価指標の開発

大原重洋*^{1,2)}

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾豊田市こども発達センター

【目的】

典型発達段階にある幼児・学童のナラティブ産出について、マクロ・ミクロの両構造の発達変化を明らかにし、同世代の聴覚障害児の評価にあたり留意すべき点を検討する。

【対象と方法】

対象は、年長児 13 名(72.8±2.6 カ月)、3・4 年生 7 名(115.5±5.7 カ月)、6 年生 9 名(144.5±1.9 カ月)であった。ナラティブの採取では、まず、絵図版 A(4 枚)について、口頭で読み聞かせて再生を求め、次いで、同じ展開構成の絵図版 B を呈示し自発産出を求めた。マクロ構造は物語文法に準拠し、1)場面状況、2)始まり、3)行為、4)結果(24 点満点)、ミクロ構造は統語機能(順接・因果接続詞)について、1)結束性、2)文章の正確性)を評価し(8 点満点)、通過率(%)を算出した。さらに、逐語録を分ち書きして自立語数を求めた(KH Coder)。ナラティブ採取法ごとに、ミクロ、マクロ構造の発達パターンについて、学年群で比較した(Kruskal-Wallis 検定)。

【結果】

再生課題(図版 A)は、年長児群、3・4 年生群、6 年生群の順で、マクロ構造：40±21%、65±9%、77±11%、ミクロ構造：67±25%、77±15%、76±13%、自立語数：36±24 語、61±13 語、84±23 語であった。一方、産生課題(図版 B)は、マクロ構造：36±24%、61±13%、84±23%、ミクロ構造：60±25%、66±16%、73±18%、自立語数：30±19 語、44±6 語、56±12 語であった。再生課題では、マクロ構造(chi-squared=14.6, df=2, p<0.01)、自立語数(chi-squared=12.8, df=2, p<0.01)において、3 群間で順次発達的な変化を認めた。産生課題では、マクロ構造は 3・4 年生群と 6 年生群間に発達的な変化を示さず、自立語数では学年群間に変化を認めなかった。

【まとめ】

典型発達児における自発産生課題による評価結果は、3・4 年生の早い段階でプラトーに達し、幼児から 6 年生までの学年群間の発達的な変化を捉えることが難しかった。聴覚障害児の談話レベルの評価については、内容再生課題によりナラティブを採取してマクロ構造を評価し、ミクロ構造では自立語数の分析が適切であることが示唆された。

倫理審査	■承認番号 (22011) □該当しない
利益相反	■なし □あり ()